◆書　評◆

池上惇『学習社会の創造―働きつつ学び貧困を克服する経済を』京都大学学術出版会，2020年

白　石　智　宙（立教大学）

1. 本書の目的

本書は，現代日本において「学びあい育ちあいの場づくり」をいかに実現するのか，その課題提起と理論研究，そして実践報告の書である．現代日本社会，ひいては現代資本制社会における生存競争は「人間が人間らしく，生命・生活を実行」することが難しい状況をもたらしている．そのような状況に対して，学習社会の創造がその解決を可能にするというのが本書のスタンスである．

本書は筆者の半世紀を優に超える膨大な研究蓄積の成果がそこかしこにふんだんに盛り込まれる形で書かれている．そのため本書評は，評者の未熟さ故に，その全てについて深く理解をしたうえで書くことが能わず，本書についての評者なりの理解をまとめ，その限りで感じられた諸論点を提示するものである．それだけ含蓄に富んでいるというのが，本書全体を通じての特徴である．

2. 本書の構成と内容

本書の構成は以下の通りである．

序　章…自然からの学習と「学びあい育ちあう」社会を目指して
第1章…これからの学習社会―被災地での新たな活動をめぐって
第2章…学習社会の創造―日本の思想としての学習社会構想
第3章…学習格差を克服するには―「恣意」と「生命・生活への欲求」，新たな人権論の登場
第4章…二宮尊徳の学習理論―二宮尊徳による報徳＝学習社会の実現
第5章…推譲思想と尊徳仕法
第6章…文化資本の経営を生み出す学習社会―文化資本の未熟な学習社会から，成熟した社会への発展
第7章…討論の広場
第8章…人権と能動的な力量
おわりに…学習社会の創造＝格差克服への道が目指すもの―ふるさと学校づくりを日本と世界に

まず序章は，過酷な生存競争を特徴とする現代社会において目指すべき「学習社会」の創造の構想について，日本には独自の経験がかつてあったとし，二宮尊徳の「報徳思想」と「尊徳仕法」を参照している．

第1章は，複数人の寄稿から成っている．1つは，筆者が岩手県気仙郡住田町に2018年に設立した学舎「ふるさと創生大学」の研究員の方々の寄稿である．続いて，池田清氏，十名直喜氏，金井満造氏とのやりとりである．そして最後に，筆者の講演記録である．いずれも，「学習社会」の実践の成果として掲載されている．

第2章は，日本の学習社会を構想するにあたり，日米比較を実施している．アメリカの学習社会論としてJ. スティグリッツ＆B. グリーンウォルドの『学習社会の創造（Creating a Learning Society）』が参照されている．また日本におけるそれとして，行基と二宮尊徳の実践が紹介されている．そして，人権論と学習論の接合を「個」と「共同性」の共生関係において捉える視角を提起している．

第3章は，西欧での学習社会論の提起として19世紀のイギリスの工場査察官の労働日日記やN. ウィーナーの学習理論，先述した

J. スティグリッツの学習社会論，そして W. ボウモルと R. ケイブズの文化経済学や福原義春らの文化資本論が参照され，文化にこそ学習と発展の可能性があることを述べている．

第 4 章では，再び二宮尊徳を参照し，改めて「報徳」が学習社会の創造の構想であることが述べられる．つまり，「報徳」は「自然や人の行動についての科学的認識を基礎に，共感して，ともに活動する」ことであり，「日本固有の学習社会の創造」であるという理解である．また遠野気仙地域における学習社会の創造の諸実践が紹介されている．

第 5 章は，「尊徳仕法」を学習社会の創造の地域的活動として捉え，「仕法土台金」という信託制度や現代の産業発展の方向性が述べられている．

第 6 章は，筆者が提起する人間発達史観に基づく学習社会の成熟について，文化資本の観点から述べられ，筆者が作成した通信制教育研究システムのテキストが掲載されている．

第 7 章は，先述した諸論点に対して寄せられたコメントが掲載されている．

第 8 章は，貧困克服の道について，河上肇や T. ピケティ，そして A. センが参照され，能力貧困と所得貧困の区別と前者にかかわる能動力の重要性が提起されている．

おわりには，本書の主張を簡潔にまとめている．つまりそれは，公正な競争を実現する学習社会の創造が，生存競争の根本からの転換と個性の相互尊重にとって避けて通れない道であるというものであった．

3. 本書の成果

本書の成果は，次のようにまとめることができる．

まずは本書が提示する「学習社会」とは何かという点について．本書では，N. ウィーナーの学習理論を参照して，学習を「人間の実践の結果が情報として脳に伝達され，従来の記憶を揺り動かすような強い刺激が加わった結果，次の実践に進歩が生まれる」ことと捉える．その学習の場は「学校内だけでなく，地域の仕事や生活とともにあるもの」という認識に立脚し，同時に自然からの学習をも位置付けている．このような学習により，「互いに尊敬しあい，人格を高めあい，個性を発揮しあい，差異から学びあい，育ちあう，新たな人間関係」が誕生する．

続いて，その「学習社会」を創造する条件について．筆者は，学習社会の創造にとって「労働者の働きつつ学ぶ権利の発展」は前提であり，「一人一人の個性や判断力，社会的経験や人格を敬愛する習慣」は不可欠な条件になると述べる．そのうえに「先祖伝来の文化や学術」を継承するタテの関係と，個性の違う他人から学び「職人能力」を評価するヨコの関係が成立する．すべての市民は，生涯にわたって学習を続け，真実の自分を発展させる．ただし筆者は，J. スティグリッツ＆ B. グリーンウォルトの唱える「学習革命」に対して，労働生産性向上によって創出された余暇は，現代社会においては「失意の時間」ともなりうることに注意を喚起する．

また「学習社会」の経済は，「量産型経済ではなく，多品種少量，小規模零細経営」を特徴とする．そこでは，「小さな財産を持ち，自立して学習の時間と空間を持つ人々の存在」が重要となる．筆者は，J. スティグリッツらのいう「知識が私的な所有の枠組みを超えて自由に組織の内外を動き回る」ことによる知識格差の解消を評価し，それがひいては富裕層と勤労者層との対立を超えて，所得格差の解消に結びつくとする．

この点について筆者は更に文化資本論との接合を試みており，「市民が人生経験を通じて学習したものこそ貴重な資産」であるとする理解に基づいて，「社会の全住民または全成員が獲得した有用な能力」を「文化資本」の主要な要素だとする．ここでは「才能の差異・多様性」を社会の「コモン・ストック」と捉え，市場を相互学習の機会とするアダム・スミスの捉え方から更に発展して，この市民が体得した「目に見えない文化資本」を「学習社会」の重要な要素だとする理解が提起さ

れる．

また「学習社会」における社会関係として，「私有を残しつつ，信託財産の提供を受け，それを活用しながら，学校やNPOなどの公共的な主体に財産を委託して，合理的で総合的な運用を図る」という方向性が示されている．これは，「個」が共同性に支援されて人間として発達しうる「学習の潜在能力」が「富者と貧者の和合」によって実現されるという方向性を意味している．ここで筆者が強調しているのは，「私有財産は，「個」を担うものとして，公正な競争の基盤となり，私有財産の一部への集中を避けるためのシステム」を構築する道が開けており，それによって実現される「分権や公正競争システムは，権力支配による生存競争秩序を制御して，地域を人間発達の場として再生する契機となる可能性をもつ」という展望である．これをいかに具体的に地域で実現していくのか，その更なる実践が求められる．

そして最後に，以上のような「学習社会」の構想は，日本ではその独自な経験として「職人型勤労者層」の存在と「民衆が知識人として市民になりうる社会への道」の開拓の歴史があり，その現代的再生が地域において始まっていることが述べられる．

4. 本書の課題

以上，評者の理解に基づいて本書の内容を概観したが，本書は「学習社会」の理論的展望と，諸地域で既に始まっている具体的諸実践の両者を包含するものである．しかし，理論と実践との間を埋める検討すべき諸論点が残されていると考える．

まずは「学習社会」の経済論であるが，それを地域産業論として捉えた場合，本書の要点は学習に基づく「多品種少量生産」の実現にあるといえる．その具体的な内容について，本書では主として農業が分析対象となっているが，それ以外の諸産業についての分析が必要である．特に，「個性の相互尊重」として市場と産業を捉える視角からは，農業以外の産業を通じた自己実現の政策論的研究は，その対極に大量生産の市場による絶え間ない包摂がある現代社会においてこそ，重要性を増している．

また，「学習社会」の実現のために，筆者は「仕法」の現代的システムといえる「信託財産システム」を提起している．仕法は，「仕法の現場から…の芸術表現を伴う真実の情報発信」と「情報を受容して学習する人々の享受と応答の能力育成」，そして「学習を基礎に現地を訪問して対話し協働すること」を意味しているとされるが，そのようなシステムを実践としてどのように実現するのか，更なる研究が求められる．

最後に筆者は，「私有と公有の両者を超えてコミュニティのような両者が共存する空間」における総有の重要性を提起している．これは「富者も貧者も…信託基金や労力・創意工夫出し合い，植林や土地改良をすすめつつ貧者を救済し，創意工夫する篤農家に奨励金や無利子無担保融資を優先して配分する」という「地域再生法」から連なる研究であるというが，コミュニティによるそのような実践についての理論的研究が不可欠である．

おわりに

冒頭でも述べたように，本書は筆者のこれまでの研究蓄積がふんだんに使われている．そのため，それら個別の理論については，筆者のこれまでの著作にあたることでより深い内容を学ぶことができるだろう．しかしその入り口として，また現代の地域社会における地域再生に向けた実践の指針として，そしてそのような実践の理論として，研究者や実践者が学ぶことの多い書であることは間違いない．